LOVE ファッション―私を着がえるとき

左：Loewe ドレス(部分) 2022 年秋冬　撮影：来田猛　©京都服飾文化研究財団　右：横山奈美《LOVE》2018 年　豊田市美術館蔵　©YOKOYAMA Nami, 2024

服を着ることは人間の普遍的な営みのひとつです。そして装いには私たちの内なる欲望が潜み、憧れや熱狂、葛藤や矛盾を伴って表れることがあります。お気に入りの服を着たい、あの人のようになりたい、ありのままでいたい、我を忘れたい.....。着る人のさまざまな情熱や願望=「LOVE」を受け止める存在としてのファッション。そこには万華鏡のようにカラフルな世界が広がっています。
本展では、京都服飾文化研究財団(KCI)が所蔵する 18 世紀から現代までの衣装コレクションを中心に、人間の根源的な欲望を照射するアート作品とともに、ファッションとの関わりにみられるさまざまな「LOVE」のかたちについて考えます。展覧会を通して、私たち人間が服を着ることの意味について再び考えるきっかけとなるでしょう。

展覧会名：LOVE ファッション―私を着がえるとき（英語表記　Love Fashion: In Search of Myself）
会期：2025 年 4 月 16 日(水)-6 月 22 日(日)　＊60 日間
会場：東京オペラシティ アートギャラリー(ギャラリー1, 2)
開館時間：11:00-19:00(入場は 18:30 まで)
休館日：月曜日(ただし、4 月 28 日(月)、5 月 5 日(月・祝)は開館)、5 月 7 日(水)
入場料：一般 1,600［1,400］円／大・高生 1,000［800］円／中学生以下無料
＊同時開催「愛について 収蔵品展 083 寺田コレクションより」、「project N 98 楊博」の入場料を含みます。
＊［　］内は各種割引料金。　＊障害者手帳等をお持ちの方および付添 1 名は無料。　＊割引の併用および入場料の払い戻しはできません。

主催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団、公益財団法人京都服飾文化研究財団（KCI）
協賛：NTT 都市開発リート投資法人
特別協力：株式会社ワコール
協力：株式会社七彩、株式会社ルシアン、ヤマト運輸株式会社、吉忠マネキン株式会社
助成：公益財団法人大林財団、スイス・プロ・ヘルヴェティア文化財団
後援：在日スイス大使館
お問合せ：050-5541-8600（ハローダイヤル）

主な作品　＊（　）内は東京展の出品作品のデザイナー名
ファッション：**Alexander McQueen** (アレキサンダー・マックイーン)、**Balenciaga** (クリストバル・バレンシアガ、デムナ・ヴァザリア)、**Bottega Veneta** (ダニエル・リー)、**Céline** (フィービー・ファイロ)、**Chanel** (カール・ラガーフェルド)、**Christian Dior** (クリスチャン・ディオール、ジョン・ガリアーノ)、**Comme des Garçons** (川久保玲)、**Comme des Garçons Homme Plus** (川久保玲)、**Gaultier Paris by sacai** (ジャン=ポール・ゴルチエ、阿部千登勢) 、**Givenchy** (アレクサンダー・マックイーン)、**Helmut Lang** (ヘルムート・ラング)、**House of Worth** (ジャン=フィリップ・ウォルト)、**J. C. de Castelbajac** (ジャン=シャルル・ド・カステルバジャック)、**Jil Sander** (ラフ・シモンズ)、**Junya Watanabe** (渡辺淳弥)、**Kimhēkim** (キミンテ・キムヘキム) 、**Loewe** (ジョナサン・アンダーソン)、**Mame Kurogouchi** (黒河内真衣子)、**Maison Margiela** (ジョン・ガリアーノ)、**Nensi Dojaka** (ネンシ・ドジョカ)、**Noir Kei Ninomiya** (二宮啓)、**Noritaka Tatehana** (舘鼻則孝)、**Pierre Balmain** (ピエール・バルマン)、**Prada** (ミウッチャ・プラダ)、 **Ryunosukeokazaki** (岡﨑龍之祐)、**Somarta** (廣川玉枝)、**Stella McCartney** (ステラ・マッカートニー)、**Thierry Mugler** (ティエリー・ミュグレー)、**Tomo Koizumi** (小泉智貴)、**Viktor&Rolf** (ヴィクター・ホスティン、ロルフ・スノラン)、**Yohji Yamamoto** (山本耀司)、**Yoshio Kubo** (久保嘉男)　ほか
アート：**AKI INOMATA、ヴォルフガング・ティルマンス、小谷元彦、笠原恵実子、澤田知子、シルヴィ・フルーリー、原田裕規、松川朋奈、横山奈美**

本展覧会の見どころ

「着ること」の奥深さを再認識する展覧会

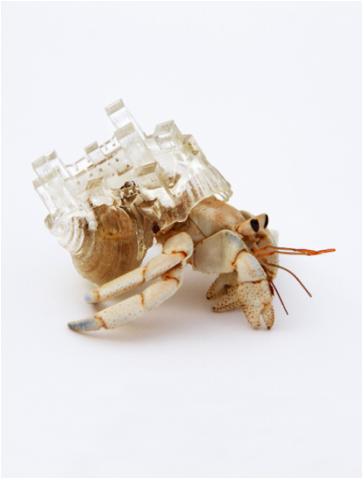
私たちは長い歴史の中で、さまざまな情熱や欲望を着る行為に傾けてきました。たとえば毛皮は豊かさや権力の象徴として古から尊ばれていましたが、現在では動物保護をうたう一方でその豊かな手触りを手放すことができないという、相反する価値観の間で揺れています。本展では、KCI が厳選した **18 世紀から現代までの衣服作品**を通じて、「着ること」をめぐる人々の多様な願望である「LOVE」とそのありようについて見つめ直します。

Gaultier Paris by sacai　アンサンブル(部分)　2021 年秋冬　撮影：守屋友樹　©京都服飾文化研究財団

ドレス(部分) フランス　1775 年(テキスタイル 1760 年代) 撮影：畠山崇　©京都服飾文化研究財団

着る人や創作する人の「LOVE」に溢れた作品を多数展示

美しい花柄が広がる **18 世紀の宮廷服**、いまにも動き出しそうな鳥たちがあしらわれた帽子、極端に細いウエストや膨れ上がった袖のドレス。歴史を振り返れば、過剰や奇抜と思える装いにこそ当時の人々の美意識が凝縮しています。現代のデザイナーも新たな形や意味を服に込め、私たちの日々の気分を切り替えるだけでなく、別の何かへと変身できるような感覚を与えます。デザインを極限までそぎ落としてミニマルな記号へと還元する**ヘルムート・ラング**や、時代や性別を超えた衣装で私たちの固定観念を揺さぶる**コム・デ・ギャルソン**が**ヴァージニア・ウルフの『オーランドー』**に触発された作品などがその一例です。着る側と作る側それぞれの熱い「LOVE」から生み出された装いの数々が登場します。



服を着る「私」の存在とその認識を広げる美術作品を紹介

着るという行為は「私」という内面を映し出す輪郭に働きかけます。本展では、さまざまな願望や葛藤を抱えながら現代を生きる多様な「私」のありようを、現在活躍するアーティストの作品を通して紹介します。身近な友人との日常を切り取り、ありのままに生きることを肯定する**ヴォルフガング・ティルマンス**の写真、同世代の女性たちのインタビューを題材にその日常と内面を描き出す**松川朋奈**の絵画、背負う貝殻を変えるヤドカリの姿に人のアイデンティティを重ねる AKI INOMATA の作品など、「私」をめぐる問いの現在形を探ります。

AKI INOMATA《やどかりに「やど」をわたしてみる -Border-》2010/2019 年　京都国立近代美術館蔵　©AKI INOMATA

衣服から装飾品、アートまで 総出品点数約 130 点

KCI の豊かなコレクションより選ばれた、18 世紀から現代までのさまざまな衣服 74 点と装飾品 15 点を中心に、アート作品約 40 点を加え、約 130 点の作品で構成します。

本展のための新作アート作品

個展やグループ展で注目されている**原田裕規**は、近年取り組んでいるハワイ在住の日系アメリカ人をモデルにしたデジタルヒューマンの映像作品《Shadowing》を展示。そのほか本展の各章にアーティストたちの作品を展示します。

原田裕規《Shadowing》2023 年　撮影：Katsura Muramatsu　©Yuki Harada

会場構成

Chapter 1. 自然にかえりたい

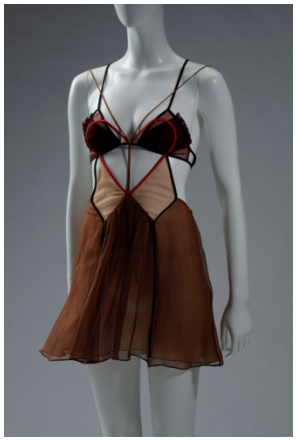
人類最初の衣服は、自然界からもたらされました。その記憶を引き継いでいるのか、私たちは毛皮の肌触りと温もりに酔いしれ、鳥の羽根で着飾り、色とりどりの花々に身を包みます。文明や技術が高度に発達した今日においても、自然に対する憧れや敬愛、身にまといたいという願望から多種多様な衣服が生み出されています。本展の始まりを飾るチャプターとして、歴史の各時代に現れた動物素材や植物柄のファッションを展示。華やかな花柄が刺繍された 18 世紀の男性用ウエストコート、20 世紀前半に流行した鳥の羽根やはく製が飾り付けられた帽子、毛皮不使用や環境保護を標榜するエコファーのコートなどに加えて、人間の毛髪を素材とした小谷元彦の作品を展示します。

左：Le Monnier　ベレー　1946 年頃　撮影：林雅之　©京都服飾文化研究財団
右：J. C. de Castelbajac　コート　1988 年秋冬　撮影：来田猛　©京都服飾文化研究財団

Chapter 2. きれいになりたい

日々、美への憧れや挫折に翻弄される私たち。顔より大きく膨らんだ袖、締め上げられて S 字型になったウエスト、歩きにくいほどに広がるスカート。「きれいになりたい」という願いは、ときに偏執的ともいえる造形への欲望を伴い、衣服の流行をつくりあげてきました。このチャプターでは、19 世紀の身体美の要を担ったコルセットや、布地の芸術作品として卓越した造形で魅惑するクリストバル・バレンシアガなど 20 世紀中葉のオートクチュール作品を中心に展示します。ヨウジ・ヤマモトやジル・サンダーなどの彫刻的な現代ファッションとともに、衣服のかたちに現れた多様な「美しさ」の創造力をご紹介します。

左：Balenciaga　イヴニング・ドレス　1951 年冬　撮影：畠山崇　©京都服飾文化研究財団、
右：Christian Dior　イヴニング・ドレス　1951 年春夏　撮影：来田猛　©京都服飾文化研究財団



Chapter 3. ありのままでいたい

社会の中でさまざまな役割を担いつつ生きる私たちの、「ありのままでいたい」という願望。遠く 18 世紀に自然主義を唱え、「ありのままの自己」の表現を希求したジャン=ジャック・ルソーの理想は叶わぬ夢なのでしょうか。このセクションでは 1990 年代以降にプラダやヘルムート・ラングらが牽引した、自然体のリアルな体を主役にするミニマルなデザインの服や、ミニマル・ファッションの究極系とも表現できる、いわゆる「下着ファッション」を中心に展示します。展示された服は、身近な友人との日常を切り取ったヴォルフガング・ティルマンスの写真や、現代社会を生きる女性のリアルを描写した松川朋奈の絵画と響き合います。

左：松川朋奈《それでも私が母親であることには変わりない》2018 年　個人蔵　撮影：加藤健
　　©Tomona Matsukawa courtesy of Yuka Tsuruno Art Office
右：Nensi Dojaka　ドレス　2021 年秋冬　撮影：来田猛　©京都服飾文化研究財団

Chapter 4. 自由になりたい

国籍や階級など、さまざまなアイデンティティにより形成される「私らしさ」。そんな「らしさ」のお仕着せから逃れたい願望は、ときに衣服に託されます。ヴァージニア・ウルフは小説『オーランドー』(1928 年)において、300 年の時の中で性や身分を越境する主人公の変身譚を、度重なる衣服を「着がえる」描写とともに著しました。このチャプターでは、アイデンティティの変容を描いた本作に触発されたコム・デ・ギャルソン 2020 年春夏コレクション、コム・デ・ギャルソン オム・プリュス 2020 年春夏コレクション、川久保玲が衣装デザインを担当したウィーン国立歌劇場でのオペラ作品《Orlando》(2019 年)の「オーランドー」三部作を一挙に紹介。異なる時代に制作された文学と衣服に通底する、アイデンティティの物語への普遍的な問いかけを探ります。

Comme des Garçons (川久保玲) トップ、パンツ　2020 年春夏　撮影：来田猛　©京都服飾文化研究財団

Chapter 5. 我を忘れたい

こんな服が着てみたいという願望、あの服を着たらどんな気持ちだろうという期待、はたまた欲しかった服に袖を通したときの高揚感。トモ・コイズミによるフリルとリボンを用いたモビルスーツのような愛らしい作品や、ロエベによるまるで唇に私の身体が乗っ取られてしまったかのような作品は、こうした服を着ることの一瞬のときめきや楽しさを伝えてくれます。服は私たちに魔法をかける(服が私たちを魅了する)。ただ、そんな服もある瞬間には急に色褪せてみえ、私はまた別の新しい服を求めてしまいます。AKI IMONATA の《やどかりに「やど」をわたしてみる》に登場する「やど」を着がえるヤドカリたちに、私たちは人間の際限のない欲望の姿を仮託し、あるいはより深い生物の本能のつながりをみているのかもしれません。

Tomo Koizumi　ジャンプスーツ　2020 年春夏　撮影：来田猛　©京都服飾文化研究財団

展覧会図録

『LOVE ファッション—私を着がえるとき』
B5 変形　280 頁
編集：石関 亮、新居理絵、五十棲亘(京都服飾文化研究財団)、小形道正(大妻女子大学)、牧口千夏(京都国立近代美術館)、渡辺亜由美(京都国立近代美術館)、池澤茉莉(熊本市現代美術館)、福島 直(東京オペラシティ アートギャラリー)
デザイン：岡﨑真理子(REFLECTA, Inc.)
出版：公益財団法人 京都服飾文化研究財団(KCI)
価格：3,000 円 (税別)

オリジナルグッズ

1. T シャツ(サイズ：S M L XL) 4,400 円　2.トートバッグ 各 1,650 円　3. ポストカード 各 165 円　4. ステッカー 各 330 円
5. ポストカード(ダイカット) 各 330 円　6. クリアファイル(A4 サイズ) 各 495 円　※全て税込

■本展覧会に関するお問い合わせ
東京オペラシティ アートギャラリー　【展覧会担当】福島直　【広報】市川靖子、吉田明子　Tel：03-5353-0756
Email：ag-press@toccf.com